

群 教 ゼ	H01 - 01
	平 15.214 集

身近な物を使って考え、工夫して

遊びを楽しむ幼児の育成

— 素材経験の積み重ねを促す教師のかかわりを通して —

特別研修員 小長谷 里美 (伊勢崎市立名和幼稚園)

主題設定の理由

今日、幼児を取り巻く環境は、物が豊かにあふれ、自分で手を加えることが少ない便利さの中にある。幼児の家庭での遊びも、テレビゲームや既製の遊び道具を使った遊びが中心の傾向にあり、自分で考え、工夫して遊ぶ経験ができるものが少なくなっている。そのため、園生活の中で、このような経験ができる環境を整えることが重要であると考え。幼稚園教育要領の領域「環境」やぐんま幼児教育プランの中でも、「様々なものにふれて自分からかかわり、気付いたり発見したり考えたり試したりすることは、豊かな感情、好奇心、思考力などの基礎が培われる」ことが示されている。自分で考え、工夫して遊ぶ経験は、「生きる力」の基礎を培うことにもつながり、このことから本主題を設定し追究することは、意義あるものと考え。

本学級の幼児たちは、2年若しくは1年保育の年長児、5歳児の学級である。進級児は、空き箱等の廃材、広告や包装紙、折り紙等の紙類、紙テープ等の素材経験をしている。「少し厚い紙が欲しいな。」「ジュースやさんになって、いろいろなジュースを売りたいな。」と必要感やイメージをもつと、それを実現できる素材は何かと考え、空き箱を切り開き、丈夫さを生かして厚紙として使ったり、簡単に色を出すことができる紙テープを活用して色水を作り、ジュースに見立てたりなど、これまでの経験を基に、素材を幼児なりに活用して、自分の思いやイメージを実現しようと考え、工夫して遊んでいる。新入園児たちも、進級児たちの遊びへの意欲に刺激を受け、遊びを楽しんでいる。このような幼児たちの考え、工夫して遊んでいくよさを生かし、自分の思いやイメージを実現するために、考え、工夫していくことの面白さや楽しさ、そして、さらにそのことで遊びが楽しくなることを経験してほしいと願っている。

しかし、これまでの自分の保育を振り返ってみると、幼児が素材の特性に気付き、遊びの中で生かした使い方ができるまでの過程を、幼児にとって必要な経験として十分に受け止めていたか、幼児の積み重ねられた素材経験を遊びの中で生かせるような援助ができていたかなど反省させられる。そこで、幼児の素材経験が積み重ねられていく過程をとらえ、その過程における教師のかかわりを通して、身近な物を使って考え、工夫して遊びを楽しむ幼児を育てたいと考え、本主題を設定した。

研究のねらい

素材経験の積み重ねを促す教師のかかわりを通して、幼児が身近な物を使って考え、工夫して遊びを楽しむようになることを実践を通して明らかにする。

研究の見通し

- 1 様々な素材に気付き、素材とのかかわりを広げていく過程では、幼児が今まで経験したこ

とのない新しい素材を知らせたり、経験したことがある素材でも違った使い方があることに気付かせたりすれば、幼児が様々な素材を使って遊びを楽しむだろう。

- 2 素材の特性に気付き、その特性を生かして使うようになっていく過程では、単調な繰り返しに見える素材へのかかわりの姿や無駄にしていると見える姿を幼児にとって必要な経験と受け止め、素材とのかかわりを十分に楽しめる状況をつくったり、幼児の素材への特性の気付きに共感したりすれば、幼児が素材の特性を生かして遊びを楽しむだろう。
- 3 友達と互いの素材経験を発揮し、遊びを楽しんでいく過程では、幼児の思いやイメージが実現できるような素材のヒントを助言したり、幼児の今までの素材経験を遊びの中で生かせるようにしたりすれば、友達と互いの素材経験を発揮しながら、考え、工夫して遊びを楽しむだろう。

研究の内容と方法

1 研究の内容

(1) 身近な物を使って考え、工夫して遊びを楽しむ幼児について

幼児にとって身近な物とは、幼児の身の回りにある素材、遊具、用具ととらえる。幼児はこれらの物に手で触れたり、全身で感じたり、繰り返してやってみたり、考えたりしながら心と体を働かせてかかわっていく。このようなかかわりを通して、素材、遊具、用具などの特性に気付き、やがてはそれを生かした使い方をして遊びを楽しむようになる。

本研究では、素材に視点を当て、本園の2年保育の教育課程 期の〈友達と考えを出し合いながら遊びを進めるようになる〉というねらいに向かっていく中で、考え、工夫して遊ぶ幼児の姿をとらえていく。

具体的な姿として、幼児が今まで経験した素材を「これを使うといいかな」「どういうふうに使おうかな」「前はあんなふうに使ったけれど、こういう使い方もあるかもしれない」などと考えをめぐらせたり、自分の経験したことがある素材の情報を友達に提供したりしながら、友達と自分たちの思いやイメージを実現していくために素材を選んだり、素材の特性を生かして使ったり、いくつかの素材を組み合わせてみたり、素材を様々な変化させたりして自分たちの思いやイメージを実現しようと遊んでいく姿をとらえる。

(2) 幼児の素材経験の積み重ねを促す教師のかかわりとは

本研究において素材を次のようにとらえる。幼児が無理なく扱うことができ、手を加えたり変化させたりでき、何かを作り出す基になる材料であり、幼児が遊びの中で使うことで、自分の思いやイメージを実現できる物であるととらえる。幼児の身の回りには、空き箱、発泡スチロール皿、カップ、ペーパー芯等の廃材、ダンボール、材質の異なった紙類、布、木の実など様々な素材がある。

幼児は、今までの自分の素材経験と、今、目の前にある素材を使って、自分の思いやイメージを実現しようとする。従って、様々な素材があることやその使い方もいろいろあることを、幼児が多様に経験できるようにしたり、遊びの中で、その経験を生かしたりしていけるように、教師が援助していくことであるととらえる。具体的には、次のようなことである。

幼児が今まで経験したことのない素材を教師が知らせたり、経験したことがある素材でも違った使い方があることに気付くような助言をしたりする。

友達が使って遊んでいる素材へ関心が向けられるような助言をする。

幼児の素材の使い方の工夫を認める。

幼児が素材に繰り返し、じっくりとかかわれる状況をつくる。
 幼児の素材経験を把握し、その経験が遊びの中で生かせるような助言をする。
 幼児同士で互いの素材経験が発揮できるような助言やかかわりをする。

2 研究の方法

研究の見通しに基づき、以下の計画で保育実践を行い、検証する。

(1) 実践計画

対 象	伊勢崎市立名和幼稚園 1・2年保育5歳児 18名（男児6名 女児12名）
期 間	平成15年5月～10月

(2) 検証計画

検証項目	検 証 の 観 点	検証の方法
見通し1	様々な素材に気付き、素材とのかかわりを広げていく過程では、幼児が今まで経験したことのない新しい素材を知ったり、経験したことのある素材でも違った使い方があることに気付いたりする助言や援助をしたことは幼児が様々な素材を使って遊びを楽しむことに有効だったか。	<ul style="list-style-type: none"> ・様々な素材や特性についての幼児の気付き、かかわりの様子、使い方などを観察法にてとらえる。 ・遊びに取り組み幼児の言動。
見通し2	素材の特性に気付き、その特性を生かして使うようになっていく過程では、単調な繰り返しに見える素材へのかかわりの姿や無駄にしていると見える姿を幼児にとって必要な経験と受け止め、場所や量などの環境を整え、素材とのかかわりを十分に楽しめる状況をつくったり、幼児の素材への特性の気付きに共感する言葉掛けをしたりしたことは、幼児が素材の特性を生かして遊びを楽しむことに有効だったか。	
見通し3	友達と互いの素材経験を発揮し、遊びを楽しんでいく過程では、幼児の思いやイメージが実現できるような素材のヒントや幼児の今までの素材経験を遊びの中で生かせるような助言や援助をしたことは、友達と互いの素材経験を発揮しながら、考え、工夫して遊びを楽しむことに有効だったか。	

研究の展開

2年保育5歳児の教育課程、期 期 期のねらい、内容をふまえて実践する中で、幼児の素材経験の積み重ねの過程における、教師のかかわり（次ページ 表 ）についてその有効性を明らかにしていく。

1 期・ 期・ 期の指導計画

（伊勢崎市立名和幼稚園教育課程より抜粋）

期	期（4月～5月）	期（6月～7月）	期（9月～10月）
ね	友達や先生と一緒に遊んだり、話しをしたりして親しみをもつようになる。	友達と一緒に遊びを進めていくようになる。 自分の好きな遊びに進んで取り組み、工夫して遊ぶようになる。	目当てをもって遊びに取り組み粘り強く頑張るようになる。
ら	好きな遊びを見つけて自分から取り組むようになる。	自分なりに目当てをもって遊びに取り組むようになる。 自分の思ったことや考えたことを先生や友達に伝えるようになる。	友達と考えを出し合いながら遊びを進めるようになる。

主 な 内 容	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の好きな遊びに取り組み、のびのびと遊ぶ。 ・いろいろな遊具や用具に親しんで遊ぶ。 ・好きな遊びを楽しみながら、友達とのかかわりをもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・気の合った友達と好きな遊びを楽しむ。 ・遊びに必要な物を考えたり工夫したりして遊ぶ。 ・自分なりの目当てをもち、それに向かって頑張る。 ・自分の考えや思いを先生や友達に言葉で伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな遊びに進んでかかわり、遊び方やルールを友達と話し合いながら遊びを進めていこうとする。 ・友達と共通の目当てに向かって、力を合わせて頑張る。
------------------	--	---	--

2 素材経験の積み重ねの過程における教師のかかわり (表)

素材経験の積み重ねの過程	教師のかかわりの視点
1 様々な素材に気付き、素材とのかかわりを広げていく過程	<p>ア 新しい素材への興味や関心が広がるきっかけになる本と、その本に載っている素材を、幼児の目に触れる場所に出す。</p> <p>イ 幼児が経験したことの無い素材を使って教師自身が遊ぶ。</p> <p>ウ 今まで経験してきた素材でも違った使い方ができることを助言する。</p> <p>エ 素材を使って遊んでいる友達の様子に、関心がもてるような助言をする。</p>
2 素材の特性に気付き、その特性を生かして使うようになっていく過程	<p>オ 遊びの発展を求めるのではなく、素材にかかわって遊んでいる幼児のありのままの姿を、素材と十分にかかわる必要な経験として受け止め、温かく見守る。</p> <p>カ 素材に繰り返しじっくりとかかわれる時間、量、場所を保障する。</p> <p>キ 素材の特性を生かして遊んでいることに共感する言葉掛けをしたり、その遊びと一緒に楽しんだりする。</p>
3 友達と互いの素材経験を発揮し、遊びを楽しんでいく過程	<p>ク 幼児の思いやイメージが実現できるように幼児の今までの素材経験を生かせるような助言をする。</p> <p>ケ 幼児の思いやイメージが実現できるような素材を幼児と一緒に探す。</p> <p>コ 互いの素材経験が発揮されて遊べるように、互いの素材経験の情報を伝え合える仲介をする。</p>

研究の結果と考察

下記(ア~コ)は教師のかかわりの視点(表参照)

- 1 様々な素材に気付き、素材とのかかわりを広げていく過程では、幼児が今まで経験したことの無い新しい素材を知ったり、経験したところのある素材でも違った使い方があることに気付いたりする助言や援助をしたことは、幼児が様々な素材を使って、遊びを楽しむことに有効だったか

事例1 きれいな丸がかけたり、線を使ったりできるんだね

6/24、男児数名がブロックで駒を作り、回して遊んでいる。ブロックの駒は、進級当初から遊んでいるので、教師は、駒はブロックだけでなく、いろいろな素材でも作れて回すことができることを経験させたいと考え、その一つとして、**イ** 工作用紙と駒軸を用意し、駒を作って、ブロックの駒を回している男児の仲間に「先生の駒はすごいぞ。」と言いながら入っていき、回す。「先生、どうやって作るの。」と幼児は興味をもち、駒作りをする。教師が作った駒が丸い形なので、幼児たちは工作用紙をいきなり丸く切ろうとする。**ウ** 「先生ね、き

れいな丸を作りたいんだ。」と言いながら、幼児を誘って材料置き場へ行く。あれこれ迷った末、プリンカップを持ってきて、その口の丸を利用して円をかく。「見て、こんなにきれいな丸がかけた。この線を切るときれいな丸が作れそうだね。」と話す。幼児は材料置き場からカップを探し、丸をかく。友達のかいた丸を見て、大きさが違うことに気付く。「そうね。A男君とB男君の丸、大きさが違うね。」と教師は共感する。「そうだよ。だって見て、僕のカップの丸はB男君のカップの丸に食べられちゃうよ。」と容器の大きさが異なることを表現する。C男が材料置き場からセロテープの芯を見つけ、「先生、これも丸だから、丸が作れるよね。」とセロテープの芯の内側を利用して丸をかく。「これの方がかきやすい。」と新たな発見をうれしそうに伝える。[エ]「C男君、すごい発見。先生もやってみよう。」と言いながら、セロテープの芯を使って丸をかく。「C男君の言う通り、セロテープの芯の方がかきやすかったよ。」と言葉を掛ける。A男、B男はC男の言ったことを試し、駒を作る。出来上がった駒を床や滑り台で回して遊ぶ。

7 / 8、[ア]製作に関する本を材料置き場の隣の机に出しておく。A男が、本に載っている飛行機を作りたいと言うので、教師は飛行機の型紙をコピーする。A男は丈夫な紙で作りたいのだろう。牛乳パックを切り開き、型紙を写している。飛行機がよく飛ぶには、羽根のバランスが大事で、型紙をきちんと写すことが必要と考えた教師は、工作用紙を利用すると型紙が写し易いのではないかと考え、[ウ]「型紙のこの所をまっすぐに写すのが難しいんだね。牛乳パックは丈夫だからA男君が使おうと思ったことはいい考えだよ。でも、まっすぐに写すのに、A男君はもっといい紙を知っているんじゃないかな。」と言葉を掛ける。A男は考えていたが思い浮かばないので、「先生、教えて。」と言う。[ク]教師は、「駒を作った時、何で作ったのかな。」と言葉を掛ける。「あつ、あの線がいっぱいかいてある紙。」とA男は言う。[ク]「そう、思い出した。線がいっぱいかいてあったね。線に合わせて型紙を置くとうまく写せそうじゃない。」と助言する。A男は型紙のまっすぐな部分を工作用紙の目に合わせておき、型紙を写し、飛行機を作る。A男は工作用紙の目を利用して色を塗る。出来上がった飛行機を滑り台や芝山などいろいろな所から飛ばして遊ぶ。

以上のことから、駒作りでは、幼児にとって身近な素材であるプリンカップを、教師が丸をかくことに活用したことで、新たな活用に気付くことができた。また、他の身近な素材でも丸がかかる物があることに気付くこともできた。飛行機作りでは、教師の助言により、駒作りで経験した工作用紙に気付き、使用したり、ます目を利用して色を塗ったりする工夫も見られた。また、駒作りでは、幼児は工作用紙の特性に気付いていないと見えても、飛行機作りで、「線がいっぱいかいてある紙」と表現したことから、気付いていたことをとらえることができた。

このように、教師が実際に行ってみたり、助言したりしたことは、幼児が様々な素材を使って遊びを楽しむことに有効であったと思われる。

- 2 素材の特性に気付き、その特性を生かして使うようになっていく過程では、単調な繰り返しに見える素材へのかかわりの姿や無駄にしていると見える姿を幼児にとって必要な経験と受け止め、場所や量などの環境を整え、素材とのかかわりを十分に楽しめる状況をついたり、幼児の素材への特性の気付きに共感する言葉掛けをしたりしたことは、幼児が素材の特性を生かして遊びを楽しむことに有効だったか

事例2 ダンボールっておもしろい(6 / 23 ~ 7 / 15)

ダンボールは積み木のように組み立てたり、中に入って遊べたり、切り開いて囲いにしたりなど様々な遊び方ができるので、雨が降り続いていた時期に、[カ]幼児たちが保育室の中でも、開放的な気持ちを味わって遊べるように、机を片付け、スペースを広くし、大きさの異

なるダンボールを出す。その後もいつでも使って遊べるように空き箱等の材料置き場に出して置く。

N男、H男、T男がはさみで苦労しながら、ダンボールを切って「レンジャーの武器」を作っている。「ダンボールは厚いんだね。はさみだと切りにくそうね。先生ね、こんな物を持っているんだけど使ってみる。」と教師はダンボールカッターを出す。「うん、使ってみる。これなら簡単に切れる。」と言いながら、続きを作る。三人は出来上がった武器を教師に見せる。教師は武器を手に取りながら、キ「かっこいいよ。ダンボールを使ったから丈夫なのが出来たんだね。これなら簡単に壊れないね。」と褒める。

以上のことから、N男、H男、T男が、テレビ番組のヒーローが持つ武器への憧れから、強く丈夫な武器を作りたいと考え、ハサミで切りにくいダンボールを切って作ろうとしたと思われる。このことは、ダンボールのしっかりした厚さがN男、H男、T男の思いに合った素材としてとらえられたと思われる。

女兒たちが、家と学校の場所を作り、ごっこ遊びをしている。ウ「学校へ行きたいのですが、どちらが学校でしょうか。」と言葉を掛け、女兒たちの様子を見守っていた。教師が掛けた言葉で、遊びに行き詰まった様子が感じられたので、「先生ね、いい考えがあるんだけどな。」と言ってダンボールを持ってくる。「こうしたらどうかな。」と言いながらダンボールを広げ、サークルのようにして、幼児たちが学校と見立てている場所を囲む。「先生、いいね。ありがとう。」と喜ぶ。ダンボールがドアのように動くことに気付き、「ここが教室に入る所ね。」と、友達同士で確認し合う。自分たちで材料置き場からダンボールを持ってきて、サークルを作り、学校の場所を広げる。キ教師は「ずいぶん、教室が広くなりましたね。」と声を掛ける。

以上のことから、女兒たちのごっこ遊びでは、場所を区切るための道具として、教師がダンボールをサークルとして活用できることを直接提示したことで、幼児はダンボールを平面に広げて立たせられることを知り、自分たちで遊びの場所を広げることに活用したのだと思われる。

男児が部屋に置いてある滑り台の先にダンボールをトンネルのように置いて、ブロックで作った車を滑り台から走らせて遊ぶ。キ教師は「トンネルができたんだね。いい考え。」と幼児たちがダンボールの空間を活用してトンネルにしたことを認める言葉を掛ける。男児の一人からブロックの車を借りて、幼児たちと遊ぶ。教師は「トンネルをくぐった、くぐったよ。」と歓声をあげる。

小さなダンボールの箱を頭にかぶって「先生、見て、帽子だよ。」と見せる。オ「ほんと、帽子だね。先生もかぶれるかな。」と幼児から帽子に見立てたダンボールを借りてかぶってみる。「だめだ。先生には小さいね。」と言う。大きなダンボールを見つけて「先生、体だつて入るよ。」と言う。オ教師は「へーえ、体が入っちゃうんだ。ロボットみたい。」と驚く。周囲にいた幼児たちが教師の言葉を聞いて「ほんと、ロボットだ。」と言い、真似をして体にかぶり、ロボットになって遊ぶ。

以上のことから、滑り台の先にダンボールをトンネルのように置いたり、頭や体にかぶったりして遊んだことは、ダンボールの空間や実際に中に入ることもできるという特性に幼児が気付き、そこに遊びのおもしろさを見いだしたからではないかと考える。

このように教師は、幼児がダンボールに十分かかわれるように、ダンボールにかかわるありのままの幼児の姿を受け止めたり、共感したりしてきた。このことが、幼児がダンボールの丈夫さ、空間が使える、体が入る、平面に広げて使えるなどの特性を生かして遊びを楽しむことに効果的であったと考える。

- 3 友達と互いの素材経験を発揮し、遊びを楽しんでいく過程では、幼児の思いやイメージが実現でき素材のヒントや幼児の今までの素材経験を遊びの中で生かせるような助言や援助をしたことは、友達と互いの素材経験を発揮しながら、考え、工夫して遊びを楽しむことに有効だったか

事例3 みんなの考えがいっぱい詰まったダンボールの迷路だね(9/24~9/29)

教師は運動会の遊戯で使う草の模型を作るため、ダンボールを探しに物置に行く。K子、M子は、教師が物置からダンボールを出すのを見て、自分たちも使いたいと要求する。教師は束ねてあるダンボールをK子とM子に出す。二人は「M子ちゃん、迷路が作れそうだね。」
「うん、早く持って行って作ろうよ。」と会話をしながら、保育室に運んでいく。仲良しのS子に迷路を作ることを話し、三人で迷路作りに取り組む。N子、Y子も仲間に入る。「ここをつなげようよ。」「いっぱい絵をかこうよ。楽しくなるよ。」「入口って書かないと、どこから入ったらいいかわからないよ。」と、五人で思ったことを言い合ったり、途中までできた迷路にもぐったりしながら迷路を作っていく。教師は「入り口にヒラヒラがついていたりすると、面白いだろうな。」と言葉を掛ける。「ヒラヒラ?おもしろそう。でも何でしたらいいのかな。」とM子が考える。**ク**「そうね、何がいいかしら。M子ちゃんが知っている物で、何かヒラヒラになりそうなものはないかな。」と教師は答える。「新聞!うーん。でもそうだ、紙テープの方がいいかな。」と自分の中で納得がいけない様子である。M子と教師のやりとりを察したN子が「M子ちゃん、これが使えるよ。」とスズランテープを出してくる。**コ**教師は「N子ちゃんが、いい物を見つけてくれたようだね。」と言葉を掛ける。「うん、いい、いい。これにしよう。」とM子は喜び、N子と一緒にスズランテープで入り口にヒラヒラを作る。教師は「M子ちゃん、N子ちゃんにいい物を教えてもらってよかったね。」「この迷路に入る時、このヒラヒラの下をくぐると、なんだかドキドキしちゃう。」と言葉を掛ける。

S子とY子が「先生、ここのダンボールがつぶれちゃう。」と助けを求める。K子、M子、N子も集まってくる。**ク**「本当だ。なんとかしなくちゃね。ここを手で持っている落ちてこないよ。」と教師が言う。K子が「先生、ずっと手で持っていられないよ。」と言う。「そうだね。K子ちゃんの言う通りね。じゃあ、**ク**ここに手の代わりにする物を置いたらどうかな。」と投げ掛ける。幼児たちは傍らにあったダンボールの切れ端を使って支えてみるが折れてしまう。「先生、オタスケマンで何か出して。」と焦っている。**ケ**「みんなで、材料置き場に行って探してみようか。」と五人の女児たちと探しに行く。S子が牛乳パックを取り出して、合わせてみるが長さが足りない。S子とY子が2個を縦につなげて合わせてみる。まだ長さが足りないので3個つなげるが、長すぎる。なかなかうまくいかない様子。幼児たちの様子を見守っていた教師は、**ク**「一番上を横にしてみたらどう。」と助言する。教師の助言通りにT型に合わせてみると、長さが足りてダンボールが支えられる。幼児たちは「できた。」と笑顔を見せる。**キ**「みんなでいっぱい考えたからよかったね。」と出来上がった喜びを共感し、教師もダンボールの迷路に入って遊ぶ。学級の幼児みんながこの迷路で遊び、十分に遊んだ後も、壊れた部分を修理して大事にする。

以上のことから、幼児たちが、教師が運動会の遊戯に使う草の模型を作るために出したダンボールを見て、迷路が作れそうだと考えたり、迷路作りにスズランテープや牛乳パックを活用したりしたことは、期、期の園生活の中で様々な素材とかかわって遊ぶことを通して、ダンボールは丈夫である、中に入ったりくぐったりできる、牛乳パックは丈夫でつなげると柱のようになるなど、素材の特性や様々な使い方を体験することができたからだと考える。このことから、期、期の経験が生かされ、ダンボールの迷路作りを通して素材経験が積み重ねられたと考える。

このように、幼児がダンボールがつぶれてしまうという問題を解決するために、試行錯誤

しながら取り組んでいくことに、今までに幼児がどんな素材を経験してきているか、その中でここでは何が活用できそうかという幼児の素材経験を生かしていこうとする教師の助言は、自分たちの思いやイメージを実現するために、互いの素材経験を発揮し、考え、工夫して遊びを楽しむことに効果的であったと思われる。

研究のまとめと今後の課題

幼児が様々な素材経験を積み重ねていくことやその積み重ねた経験が生かせるような教師のかかわりを通して、身近な物を使って考え、工夫して遊びを楽しむ幼児を育成してきた。様々な素材に気付き、素材とのかかわりを広げていく過程では、教師が新たな素材を使って遊ぶことや直接的な素材の提示により、幼児が興味をもち、新しい素材を知って、それを使って遊ぶ姿が見られた。また、教師の助言により、経験したことがある素材でも違った使い方ができることを知って、他の素材にも目が向けられるという姿も見られた。素材の特性に気付き、その特性を生かして使うようになっていく過程では、素材のもつ特性に気付いて遊びの中で生かしたり、そこに面白さを感じたり、自分の思いやイメージを合わせたりして遊ぶ姿が見られた。友達と互いの素材経験を発揮し、遊びを楽しんでいく過程では、遊びの中で、自分の思いやイメージを実現しようと、自分の経験した素材や友達同士で教え合った素材を試行錯誤しながら使って遊ぶ姿が見られた。このような幼児の姿から主題に迫れた。

幼児の素材経験の積み重ねを促すために、素材経験が広がるきっかけになる本を保育室に置く、幼児が今まで経験したことのない素材で教師自身が遊ぶ、幼児同士の素材経験の情報を伝える仲介をする、幼児の積み重ねられた素材経験を生かす助言をするという、教師のかかわりが効果的であることが確認できた。この研究を通して、教師の役割について改めて考えることができ、その一つとして情報の発信者的役割も重要であることが分かった。

教師が、幼児に新たな素材を提供する時、幼児がその素材の特性に気付くことができるようにという意図をもってかかわってきた。しかし、その時点では、目の前にいる幼児の姿からは、幼児が素材の特性に気付く経験ができたことをとらえる場面はなかったが、後になって遊びの中で、あの時の経験がここにつながったと実感することがあった。幼児が素材経験を積み重ねていくためには、経験のつながりを教師がとらえながら、そのことを、遊びの中で生かせるようにかかわっていくことが必要である。

幼児教育では、幼児にとって一つ一つの経験が、とても意味あることになる。素材を通して確かめることができた経験の積み重ねということを幼児理解に生かし、幼児理解をさらに深め、指導に役立てていきたい。

<参考文献>

- ・柴崎 正行 著 『保育者の新たな役割』 小学館出版（1998）